

Hem21 NEWS

公益財団法人
ひょうご震災記念21世紀研究機構
ニュース

「Hem21」は、ひょうご震災記念21世紀研究機構の英語表記である
Hyogo Earthquake Memorial 21st Century Research Instituteの略称です。

VOL. **50** 平成27年
(2015) 3月

CONTENTS

- 1 阪神・淡路大震災20年シンポジウム「三大震災の復興と教訓」を開催
- 2 こころのケア国際シンポジウム「災害とこころのケア-復興と心の回復-」を開催
- 3 災害時の生活復興における共通課題
- 4 平成26年度の「ひょうご講座」および「21世紀文明研究セミナー」の開催結果について
- 5 情報ひろば
- 6~8 人と防災未来センター
MiRAi

管理部

研究調査本部

人と防災未来センター

こころのケアセンター

学術交流センター

昨年11月26日、神戸ポートピアホテルで、阪神・淡路大震災20年シンポジウム「三大震災の復興と教訓～次なる大災害に備えて～」を開催し、約230人が参加しました。

五百旗頭真当機構理事長の主催者あいさつ、井戸敏三兵庫県知事の来賓あいさつに続き、東京大学の御厨貴名誉教授（当機構研究調査本部政策コーディネーター）および政策研究大学院大学の飯尾潤教授による基調講演が行われました。

まず、御厨名誉教授は、「会議は踊る?～危機管理コミッティとしての復興構想会議」と題して、阪神・淡路大震災の際の「復興委員会」と東日本大震災の「復興構想会議」を比較検証。その上で、今後起こり得る大災害への対応として、災害後すぐに危機管理コミッティをつくる重要性を説きました。さらに、当該組織は大きな組織である必要はなく、少数精鋭がベストであり、事の善しあしはともかく「復興構想」の施策化を担う官僚機構とのつなぎ役が重要であること、今後の災害への準備を進めるに際しては、復興委員会と復興構想会議がモデルになることを述べ、政治家の関与の排除を提起しました。

次に、飯尾教授は、「東日本大震災の復興政策と課題」と題して、「復興構想会議」検討部会長として経験したことを基に、現時点での東日本大震災の被災地が抱える問題点を紹介。復興施策面での今後を考える上で、復興の主体はあくまで現地を知っている市町村であり、政府は市町村が使いやすい施策をつくり、できる限り口出しをしないことが重要であると訴えました。また、行政組織間等での情報共有が不可欠で、東日本大震災の復興においては、さまざまなレベルの行政間でしっかり情報共有ができなかったことによる齟齬が起きたことを指摘しました。加えて、情報共有には時間がかかること、被災地での情報共有に関する工夫をしっかりとっておかないとせっかく良い施策をつくっても、うまくいかないことを強調しました。

その後のパネルディスカッションには、基調講演の

阪神・淡路大震災20年シンポジウム 「三大震災の復興と教訓」を開催

講師2人と共に東京大学大学院人文社会系研究科の加藤陽子教授が登壇し、大災害について、復興を担う側ではなく被災地の「民衆」の側から捉え直し、行政の動きを批判的に見つめる「民衆の目」と、大災害における不安を抱える主体である「民衆の動き」があると述べました。その上で、不安を抱える民衆をケアする存在として、宗教の存在が大きくなることや、阪神・淡路大震災時の日本赤十字社の動きの陰に皇后陛下がおられた事例を紹介し、災害時に皇室の存在が被災者の心の支えとなっていることも指摘しました。

続いて、東京大学先端科学技術研究センターの牧原出教授は、復興に際する「自助・共助・公助」の中で「共助」に着目し、共助は復興のフェーズに応じて変わっていく上、必ずしも表に出ることばかりではないと語りました。さらに、阪神・淡路大震災では、その年がボランティア元年といわれたように、ボランティアが活発に活動したこと、東日本大震災では企業の対応が目目されたことを述べ、ともにしっかりと記録がなされていなかったことを指摘し、「共助」の今後のあり方およびその記録が、今後の大きな課題であることを提起しました。

最後に、コーディネーターを務めた五百旗頭理事長が、近代以降の三大震災の復旧・復興過程を総括しつつ、地震活性期に入っている状況を鑑み、現行法制度の下で対処するだけでは十分ではないため、専門性も加味した制度や枠組みを事前にしっかりつくっておく必要があることを強調し、シンポジウムを締めくくりました。



こころのケア国際シンポジウム 「災害とこころのケアー復興と心の回復ー」を開催

兵庫県こころのケアセンターでは、阪神・淡路大震災20年および当センター開設10周年の節目に当たり、「災害とこころのケアー復興と心の回復ー」をテーマにこころのケア国際シンポジウムを昨年12月1日に神戸国際会議場で開催しました。保健・福祉関係業務従事者や自治体職員、一般の方など約240人が参加しました。

開会に当たり、主催者を代表して吉本知之兵庫県副知事があいさつし、これまでの支援活動、研究調査を踏まえ、災害・事件後の精神科医療および精神保健活動を行う、兵庫県こころのケアチーム「ひょうごDPAT」を足元させることを表明し、DPAT（災害派遣精神医療チーム）の活用策を含めたシンポジウムの成果に期待を寄せました。また、当機構の五百旗頭真理事長が「先進社会における災害復興にはこころのケアが不可欠であり、阪神・淡路大震災の体験の中から兵庫県こころのケアセンターが生まれたことは誇らしいことである。本日は内外から講師を迎え、実践に即しかつ専門性を持った水準の高い議論をいただけることを期待している」と述べました。

シンポジウムでは、まず、加藤寛センター長が当センターの10年の活動を振り返り、「今後はDPATを効率的に運用できるような体制づくりに寄与したい」と語りました。

講演においては、まず、福島県立医科大学の前田正治教授から東日本大震災被災地である福島の現状について、「福島県においては、地震・津波に加え、原発災害にまつわる心の問題、特に放射線降下物に対する不安・恐怖や被ばくしたと思われることへの不安があり、アウトリーチ主体の支援活動や教育啓発活動を行っているが、今後息の長い活動をどのように行っていくかが課題である」と報告がありました。

次に、災害、大事故などの直後に提供できる心理的支援マニュアルである「Psychological First Aid (PFA)」作成の主要メンバーである、米国国立子どもトラウマティック・ストレスセンターテロ・災害対策部門のメリッサ・ブライマー部門長から、米国における災害時の心理的援助の方法について具体的な事例に基づいた報告がされ、「専門家が集い、共に学び合うことが重要であり、今後とも、国ごとにシステムの違いは

あるが、お互いが刺激し合っていきたい」という主旨でお話いただきました。

パネルディスカッションの第1部として、まず、東北大学大学院医学系研究科の松本和紀准教授が東日本大震災における、急性期から復興期へのこころのケアに係る支援活動について報告され、「今後の課題として、仮設住宅から復興住宅への移住に伴う新たなコミュニティづくりが、精神健康上、重要になってくる」と講演いただきました。また、中華人民共和国婦女連合会国際部アジア局の張広雲局長から、日中が協力して実施した四川大震災復興支援としてのこころのケア人材育成プロジェクトが紹介され、「地域に根差したこころのケアに従事する人材が育成される等の大きな成果を挙げた」と報告がありました。

パネルディスカッションの第2部として、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所災害時こころの情報支援センターの金吉晴センター長および加藤センター長を座長として、「こころのケアの連携を巡って」をテーマに演者全員で討議がなされました。

大規模災害や事件における、こころのケアには地域の持っている「効力感」が大切であり、タウンミーティングなどを通じて地域の絆をいかに再構築していくかが課題であるとの意見が出されるとともに、阪神・淡路大震災から20年間にわたり蓄積された兵庫県こころのケアセンターのノウハウを、引き続き全国に発信してほしいとの要望がありました。

最後に、金座長より、「DPATは精神救急の専門家だけでなく、災害・事件後、こころのケアについて中長期的に支援を行っている専門家も入ったサポート体制をつくっていくことが必要である」との考え方が示されました。



災害時の生活復興における 共通課題

嘱託研究員 荒木裕子



はじめに

当機構研究調査本部では、昨年度の復興庁委託事業「東日本大震災生活復興プロジェクト」に引き続き、今年度も自主事業として研究会方式で「災害時の生活復興に関する研究」を行っている。今年度は昨年度よりさらに深めた課題、いまだ扱えていない課題、そして「生活復興」の各分野に共通する課題を、現在の東北の被災地に加え、将来の災害に対する備えとして明らかにすることを目的としている。

そもそも、本研究対象である「生活復興」にはその定義の難しさがある。「復興」の定義に加え、「生活」の分野は幅広く、現実の暮らしの中では多様な分野が綿密に張り巡り、相互に関係を持って成り立っているからだ。それゆえに個別のことに着目しただけでは解決できない問題が多々ある。そういったことから、個別課題に加え、生活復興の「共通課題」を明らかにすることの重要性が言えよう。ここでは研究会で明らかになった生活復興の共通課題についていくつか取り上げたい。

コミュニティの再構築と役割の補完

復興の実現のために、例えば被災後のコミュニティの再生や再構築、復興計画検討段階における住民参加の重要性は、東日本大震災以前から指摘されている。本研究ではその中身と補完関係を具体的に掘り下げている。コミュニティの定義は多々あるが、自然災害により大きく影響を受けるのは、居住圏、生活圏を共にする地域コミュニティであろう。東日本大震災の被災地であれば集落部で、浜の仕事や農繁期の手伝い、近親者の世話といった、貨幣による価値尺度だけでは測れない小さな地域経済が循環し、地域の構成員がそれぞれの役割を担い、関係性を築いていた。それが被災により、その仕組みが失われ、金銭的な支出の増加や、活発な活動が損なわれたことによる健康不良、さらには社会参加できない人の孤立が発生している。

これに対し、それぞれの課題に対応するよう生活支援や見守り活動が行われ、またNPOや社会的企業によって、働くことを通した社会参加の機会を取り戻そうという動きもある。これらの失われたコミュニティ機能の補完を担う側面が示されるとともに、今後の継続性の課題も示されている。また、復興における主体的な住民参加は、そのプロセス自体が、コミュニティ機能再構築の過程とも言えるであろう。

復興期と平時の連続性・連関性

加えて重要なこととして復興期と平時の連続性が示されている。これには2つの側面がある。一つ目は被災前の状況を踏まえ、復興後の姿を想定し、再建あるいは支援を行うこ

との重要性である。例えば商店街の再建を行うときに、被災前の実態を把握し、環境の変化、復興後の商圈を想定し、過剰投資を招かないようにすることである。また生活支援においても、被災という特殊な状況に特化しすぎると、支援する側、支援される側ともに一般社会や他の組織と分断され、代替性が確保できず、支援の継続性が保てなくなることも指摘されている。支援の出口を考え、平時の社会でも実施できる支援の方法や地域住民を含んだ支援者のつながりをつくるのが重要であろう。

また一方で、平時からの脆弱な状況が被災によってさらに拡大してしまう側面もある。産業面では復旧に時間と資源を取られ、時代の変化への対応が損なわれることが示され、被災前の状態に戻すだけでなく、先を見越した革新性を支援する、柔軟な制度設計の重要性も指摘されている。また、女性や子ども、障害者などが置かれる、日頃から声を上げづらく社会的に排除されがちな状況は、被災時にもより一層の被抑圧状態として表れており、復興において弱者の立場に留意するとともに、平時からの意思決定の場への取り込みの必要性が指摘されている。

生活復興と安全

東日本大震災の特徴はいくつかあるが、そのうちのひとつとして、広範囲で従前の土地で住宅の再建ができないことが挙げられよう。筆者は研究会に加え個人研究として、東日本大震災の被災地における災害危険区域の指定について研究しているが、岩手、宮城、福島沿岸市町村で、津波で浸水した土地の約3分の1が災害危険区域に指定され、なんらかの居住の制限を受ける状態にある。居住地の移転ということは、従来の生活を根底から変えることであり、実際の被災と並び「生活」への影響は甚大であると考えられる。南海トラフ地震津波でも広大な面積で浸水が想定されている。被災直後はその反動から「安全」への認識が高まる。この防災意識を保つことは当然として、生活復興に向けて、安全確保の方法も地域性を考慮した議論が必要なのではないか。

おわりに

「復興」は「復旧」と対比して語られるときに「被災の状況を踏まえ、よりよい状態にする」と語られる。生活の復興のためには、個別的な対応だけでなく、分野横断的で、時間軸を考えた包括的な対応が求められている。また、将来への備えとして、生活復興課題の体系的・時系列的整理の上に立った生活復興シナリオといった事前の検討も必要であろう。

平成26年度の「ひょうご講座」および「21世紀文明研究セミナー」の開催結果について

ひょうご講座

ひょうご講座は、県民の生涯学習のニーズに応えるため、県内の大学や研究機関と連携し、兵庫にゆかりのある知的資源を活用して、さまざまな分野における学術的かつ専門的な大学教養レベルの連続講座による高度な学習機会を提供することを目的に開催しています。

今年度は「経済」「生命化学」「心理」「考古」「国際理解」「緑環境」の6科目を、9月から12月にかけて兵庫県民会館（神戸市中央区）で開講しました。

以前から一番人気の高い分野である国際理解では、「チャイナドリームと日中関係の行方」と題して、習近平国家主席が唱える“中国の夢=中華民族の偉大な復興”は、海洋進出問題、米国との新型の大国関係、民族・環境問題などを抱えながらも実現するのか、そして日本はどう付き合っていけばいいのか、といったさまざまな切り口で解説する講座を実施しました。また、根強い人気のある経済分野では、「EUの発展と危機、日本は何を学べるか」と題して、欧州連合（EU）がどのようにして5億人の巨大な超国家組織に形成されたのか、EUが抱える問題とは何なのか、日本との経済連携協定の見通しはどうかなどについて考察する講座を実施しました。両講座とも受講者から多くの質問があり、学習意欲の高さを感じる充実したものとなりました。

女性に人気が高い心理分野では、「心理療法を通じて見える人の心の不思議さ・奥深さ」をテーマに、「こころ」に悩みを抱えた方や、「こころ」の病でつらい思いをしている方の「無意識」が心理療法の中でどのように表れるのか、そして心理療法の結果、その方たちの無意識にどのような変化が生じていくのかなど、非常に興味深い内容の講座となりました。



また、新しい分野として、生命化学「健康サイエンス」では、病気について化学分子サイズや挙動で理解していただくとともに、DNA等の基本的な構造から最先端の話や未来生活への応用等について学んでいただくことを目指す講座を実施しました。次に考古では、「考古学最新研究から“ひょうご”を考える」のテーマどおり、古代ひょうごの「人」や「社会」、地震等による地形の変遷からの「環境」、国内外との「交流」の存在など最新情報を盛り込んだ内容の濃い講義が展開されました。さらに、緑環境では、「多面的な視座から見る緑化の可能性」と題して、都市の緑の持つ温湿環境の改善、景観の形成、防災機能、生物多様性の確保などさまざまな機能について、受講生の探究心に沿った実践的な講義内容となったほか、講師とのディスカッションが多く見られたエネルギッシュな講座となりました。

受講者は全体で290人を数え、60歳以上の方が8割を占め、そのうち約2割が地域の高齢者大学等にも参加している方でした。学習意欲に満ちあふれた方が多く、全体の6割以上が以前にも受講した方でした。受講者ニーズに応えた講座編成を行った結果、アンケートでは、8割以上の方に「満足」「ほぼ満足」の回答をいただきました。コーディネーター教員が講義全体を取りまとめ、受講者の理解をより深めるための進行役として講義に携わったことも、満足度を上げる一つの要因になったと考えています。

21世紀文明研究セミナー

21世紀文明研究セミナーは、当機構の研究成果を広く県民に還元するとともに、HAT神戸における国際関係機関等の集積を生かして、阪神・淡路大震災が提示した近代文明の課題について幅広く議論を深めるため、高度で専門的な知識を求める研究者、行政・企業関係者、NPO関係者、大学院生、一般県民等を対象として開催しています。

平成26年度は「安全安心」「共生社会」「防災」「環境」「芸術」の5分野で各6講座の計30講座を、10月8日から3月18日までの5カ月間にわたり実施しました。

このセミナーは、30講座の中から分野を限定することなく、関心のある講座を受講できること、講義の後にディスカッションができる場を設けていることが特色です。

具体的には、安全安心分野では「減災社会に向けての新たな視座」をテーマに、「事例にみる共生型コミュニティの実際と展望」「災害時の生活再建」「安全安心と日本」などに関する6講座を、共生社会分野では「人口減少下の多自然地域の魅力づくり」をテ



ーマに、「地域の創造性・自立・コミュニティ」「里山保全活動と魅力づくり」「多自然地域の観光開発による魅力づくり」などに関する6講座を、防災分野では「南海・東南海地震を踏まえた広域災害の対応」をテーマに「過去に学ぶ地震による建物被害と対策」「災害時要援護者支援の課題」「災害時の医療対策」などに関する6講座を、環境分野では「地球環境保全の展望」をテーマに「循環型社会」「PCB汚染への取り組み」「里山林の生物多様性」などに関する6講座を、芸術分野では「展覧会が見せるもの-企画者の視点から-」をテーマに「「だまし絵」の過去と現在」「コレクションとテーマ展-「阪神・淡路大震災から20年」の場合-」「スイス人画家フェルディナント・ホドラー」などに関する6講座を開催しました。

以上の30講座について、延べ840人の方に受講いただきました。とりわけ、防災分野は関心が高く、5分野のうち最も受講者が多く、延べ332人の方に受講いただきました。また、防災分野の受講者には、企業や行政機関で勤務する方、自治会役員や防災士の割合が多かったのも特徴的でした。

各講座の終了後に回収しているアンケートでは、約9割の方から、今後の活動や研究に役立てたいとの回答をいただきました。来年度も、アンケートも参考に時宜にかなった内容を盛り込んで開催する予定です。

管理部

「翔べ フェニックスII -防災・減災社会の構築-」
刊行のお知らせ

阪神・淡路大震災20年を迎えるに当たり、復興への歩みや、さらなる大災害にどう備えるべきかなど、さまざまな視点から防災・減災社会の構築に向けた取り組みを伝えるため、各分野を代表する著名人(17人)の執筆により、「翔べ フェニックスII」(平成17年刊行)の続編となる標記書籍を刊行しました。

市販はしていませんが、全文を当機構ホームページに掲載していますので、ぜひ、ご覧ください。

<http://www.hemri21.jp/phoenix2/index.html>



■執筆者

- 新野幸次郎(神戸都市問題研究所理事長)
- 井戸敏三(兵庫県知事、関西広域連合長)
- 齋藤富雄(兵庫県国際交流協会理事長)
- 河田恵昭(当機構副理事長、人と防災未来センター長)
- 小澤修一(神戸赤十字病院院長)
- 松岡由季(国連国際防災戦略事務局駐日事務所代表)
- 立木茂雄(同志社大学社会学部教授)
- 室崎益輝(当機構副理事長、ひょうごボランティアプラザ所長)
- 清原桂子(神戸学院大学現代社会学部教授、当機構参与)
- 佐渡 裕(兵庫県立芸術文化センター芸術監督)
- 宮川知雄(日本防災士機構顧問)
- 野尻武敏(神戸大学名誉教授、当機構顧問)
- 加藤 寛(当機構理事、こころのケアセンター長)

諏訪清二(松陽高校教諭)
安藤忠雄(建築家)
五百旗頭真(当機構理事長)
貝原俊民(当機構特別顧問)

●問い合わせ

管理部 TEL 078-241-1188 <http://www.hemri21.jp/>

学術交流センター

研究情報誌「21世紀ひょうご」第17号、第18号発行のお知らせ

現代社会の課題を的確に捉え、専門的立場から課題を分析・紹介し、具体的な提案を行う情報誌です。阪神・淡路大震災から20年を迎え、第17号では、「阪神淡路20年 創造的復興の今」をメインテーマに、阪神・淡路大震災からの創造的復興の現状を総括する特集とし、第18号では、「阪神淡路20年 超巨大災害に備える」をメインテーマに、過去の災害経験を踏まえつつ、「南海トラフ巨大地震など将来に予想される大災害への備え-減災-」について考える特集とし、各分野の学識者から寄稿いただいております。

■B5判 第17号約120ページ、第18号約100ページ

※執筆者等詳細については、当機構のホームページを参照ください

http://www.hemri21.jp/the21_hyogo/index.html

■発行=年2回

■購読料=800円(送料別途)

※定期購読をされる場合は、年間購読料1,600円(送料込み)

●申し込み・問い合わせ

学術交流センター TEL 078-262-5713 FAX 078-262-5122

Eメール gakujutsu@dri.ne.jp

HAT神戸 掲示板

兵庫県立美術館

県美プレミアム

IN MY ROOM / ON THE ROAD -私の部屋、あるいは路上にて-

芸術の近代性を語るのに不可欠な「IN MY ROOM(私の部屋で)」と「ON THE ROAD(路上にて)」の2つをキーワードに、肩肘を張らないアプローチで同館の収蔵品から選定した作品を展示します。

■会期=3月21日(土・祝)~7月5日(日)

■観覧料=一般510(410)円、大学生410(330)円、高校生260(210)円、65歳以上255(205)円、中学生以下無料

※障がいのある方とその介護の方1人は各当日料金の半額(65歳以上を除く)

※()内は20人以上の団体割引料金

堀 文子 一所不在・旅展

今なお新しい創作に打ち込み続ける日本画家・堀文子。飽くなき好奇心と探求心で歩んできた足跡に沿いながら、初期の作品から最新作まで130点を展示し、80年に及ぶ画業を回顧します。

■会期=4月18日(土)~6月7日(日)まで

※5月4日は開館し、7日は休館します

■観覧料=一般1,300(1,100)円、大学生900(700)円、高校生・65歳以上650(600)円、中学生以下無料

※障がいのある方とその介護の方1人は各当日料金の半額(65歳以上を除く)

※()内は、前売料金および20人以上の団体割引料金(高校生・65歳以上は前売り販売なし)

●休館日=月曜(5月4日は開館し、7日は休館します)

●開館時間=10時~18時(特別展開催中の金曜・土曜は20時まで)

※入場は閉館の30分前まで

TEL 078-262-0901 <http://www.artm.pref.hyogo.jp/>

JICA関西

◆すべての子どもに教育を セミナー&コンサート

ネパールの教育支援について考えるセミナーです。ネパールの伝統楽器を演奏する楽団「クトゥンバ」も登場します。詳細は、JICA関西ホームページをご覧ください。

■日時=5月10日(日)午後

■場所=JICA関西

■参加費=無料



ネパールの音楽団「クトゥンバ」

◆食べることから始める国際協力!

JICA関西食堂の月替りエスニック料理

JICA関西1階の食堂(カフェテリア方式)は、どなたでもご利用できます。完全禁煙で、安心して料理を楽しめ、子供椅子も用意していますので、お子様連れも歓迎です。大好評の月替りエスニック料理の4月は人気投票1位の料理、5月はネパール料理をご用意します!ぜひ、お気軽にお立ち寄りください。



写真は2月のケニア料理

メニューの詳細と写真については、

こちら→ <http://www.jica.go.jp/kansai/office/restaurant/index.html>

■営業時間=(昼)11時半から14時まで (夜)17時半から21時まで

※各終了30分前ラストオーダー

※年中無休(年末年始を除く)

◎申し込み・問い合わせ

JICA関西(独立行政法人国際協力機構関西国際センター)市民参加協力課 〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

TEL 078-261-0384 FAX 078-261-0357

その他、詳細はJICA関西ホームページをチェック!→<http://www.jica.go.jp/kansai/>

日本赤十字社 兵庫県支部

復興支援をはじめとした、日本赤十字社の活動に力を。

東日本大震災から4年。

被災地の復興への歩みは、まだまだ続きます。

苦しむ人がいる限り、苦しむ地域がある限り、日本赤十字社は、これからも復興支援活動を続けます。一日も早い復興のために、皆さまの温かいご支援をよろしく願っています。

赤十字活動は、皆さまからお寄せいただく活動資金で成り立っています。活動資金にご協力をお願いします。

■募金方法=郵便局・ゆうちょ銀行

口座記号番号 01110-0-1136

口座加入者名 日本赤十字社兵庫県支部

※窓口で取り扱いは場合、振込手数料は無料です

◎お問い合わせ

TEL 078-241-8921

赤十字 兵庫

検索



災害メモリアルKOBEBE2015



作文発表

1月10日午後、人と防災未来センターにて、「災害メモリアルKOBEBE2015」が開催されました。

次世代の育成、世代間交流による語り継ぎなどを通じて、市民の防災力を高めることを目的として開催するもので、今年で10回目。今回のテーマは「話したい、聞きたい阪神・淡路大震災～バトンをつなぐ～」でした。

前半の部は、中学生と大学生による作文やパワーポイントでの発表。神戸市内の2つの学校で行われた特別授業を受けた生徒・学生から「日常から防災を」「普段できないことはいざという時にできない」といった感想が述べられました。

次に、県立佐用高校と豊岡総合高校の生徒・OB・OGがスペシャルセッションを実施。佐用高校からは「豪雨災害の日を忘れ

ず、ボランティア精神と相互扶助の精神を引き継ぎ、伝えていきたい」との、豊岡総合高校からは「台風による水害に見舞われた時、ボランティアや地域の方々に支えられ、自分たちも人のために役に立ちたいという思いが強くなったことが活動の原動力になった」との発表がなされました。

後半の部のパネルディスカッション第1部は、「バトンをつなぐ」をテーマに、震災から20年が経過するに当たり、いかにしてバトンをつないだかについて発表し合う場となりました。

また、パネルディスカッション第2部では、「話したい、聞きたい 阪神・淡路大震災20年」をテーマに、阪神・淡路大震災をめぐる親子・師弟・先輩後輩などの2つの世代が話し聞き、教え学び、導き導かれてきた20年について7人のゲストが意見交換を行いました。



スペシャルセッション



パネルディスカッション第1部



パネルディスカッション第2部

あった、あった、ここや。
えらい大きい会社やなあ、ドキドキしてきたわ。
あかん、鎮まれ心臓
営業マンに弱気は禁物、最初が肝心や。

初めて出会った
人と人をつなぐ。
それが、
わたしたちのしごとです。

「はじめまして。カワサキと申します」
名刺を交換したらお付き合いの始まり。
小さな紙片からどれだけ仕事が広がるか、
さあ、ガンバルぞお～!



ひょうご安全の日のつどい



阪神・淡路大震災から20年を迎えた1月17日、震災の経験と教訓を発信し、1.17を忘れずに語り継ぐため、「ひょうご安全の日のつどい」が県公館で開催されました。

メモリアルウォークの終点となったHAT神戸では、なぎさ公園全域で防災啓発展示や防災訓練、ステージでのミニコンサートなどが実施されました。公園中央には炊き出しのブースが並び、うどん、豚汁、カレーライス、ぜんざいなどが振る舞われました。

当センター「友の会」は、阪神・淡路大震災被災者の団体「いきいきネットワーク」との協働で炊き出し大会に参加。友の会メンバーは炊き出しブースの「カレーコーナー」で配膳等を行いました。



雨がちらつく中にもかかわらず、食材はすぐに完売し、炊き出し大会は盛況のうちに終わりました。

1・17ひょうご安全の日宣言

阪神・淡路大震災から20年経った
私たちは この震災を経験しなかった人たちにも
これからの災害に対して 私たちの教訓を活かしてほしい
そう願って 伝え続けてきた

でも 実際に経験しない限り 災害の教訓は他人事になっている
こんなにも 地球温暖化が進み 天変は増え
地球激動期が続き 地変も増え続ける
荒ぶる地球の至るところで 新たな災害が起こり始めている

東日本大震災の本格的復興が ようやく始まった
しかし 災害の多発・激化は わが国全体をおおっている
思わぬ季節に大雪が降りて まちが孤立し
思わぬ地域に大雨が降り 川があふれ 山がすべる
眠り続けているはずの火山が噴火し 忘れかけていた活断層が地震を起こす
防災・減災の努力が積み重なっても ささまざまな災害が襲ってくる

進行する高齢化や人口減少
そして 止まらない東京一極集中と地方衰退
地域防災力はまだまだ不足している

でも 国土の安全の取組みは 減災社会につながる希望だ
災害による被害を小さくし しなやかに対応して 回復を早める
自助・共助・公助の組み合わせで実現できるはずだ

こんな時こそ 震災の教訓の出番だ
私たちの社会が 災害に負けず 持続的に発展するために
伝える 備える 活かす 阪神・淡路大震災の教訓を実践しよう
震災の教訓は 安全・安心な社会につながる知恵だから

2015年1月17日
ひょうご安全の日推進県民会議



(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
観覧案内・予約 / TEL 078-262-5050 <http://www.dri.ne.jp/>

開館時間 9時30分～17時30分(入館は16時30分まで)
※7月～9月は9時30分～18時(入館は17時まで)
※金曜、土曜は9時30分～19時(入館は18時まで)

入館料金

大人	大学生	高校生	小・中学生
600円(480円)	450円(360円)	300円(240円)	無料

※()は20人以上の団体料金
※障害者、65歳以上の高齢者は上記の半額

休館日
毎週月曜(月曜が祝日の場合は翌平日)、12月31日と1月1日
※ゴールデンウィーク期間中(4月29日から5月6日まで)は無休
※資料室の開室日についてはホームページでご確認ください

交通

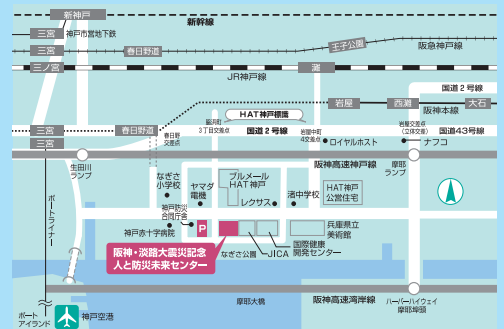
鉄道

- ・阪神電鉄「岩屋」駅、
「春日野道」駅から徒歩約10分
- ・JR「灘」駅南口から徒歩12分
- ・阪急電鉄「王子公園」駅
西口から徒歩約20分

バス

- ・三宮駅前から約15分
- ・阪神高速道路神戸線
「生田川」ランプから約8分
- ・阪神高速道路神戸線
「摩耶」ランプから約4分
- ・阪急・阪神・JR「三宮」駅から約10分

●有料駐車場あり ●バス待機所(予約制/無料)あり



1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」表彰式・発表会



当機構が兵庫県、毎日新聞社と共催し、学校や地域で取り組む防災教育・活動を顕彰する1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」の表彰式・発表会を、1月11日に兵庫県公館で実施しました。



今回は、全国から応募のあった131校の中から、平成13年度から毎週1時間、グループごとに9教科に関連付けた防災学習「新庄地震学」を実施し、地震や津波の災害学習、地域や小学校との交流を行ってきた田辺市立新庄中学校がグランプリに選ばれました。

また、今年度から優れた取り組みを始めた初応募校も、新人賞を含めて29校・団体が受賞しました。式典のオープニングとして、県

立長田高等学校と県立神戸聴覚特別支援学校の生徒が手話と合唱を披露。また、表彰式の後には、グランプリ、ぼうさい大賞、優秀賞を受賞した学校・団体が、それぞれ活動内容を報告しました。全国各地で取り組まれている優れた活動の発表に、参加者は熱心に聞き入っていました。

また、防災力強化県民運動ポスターコンクールも併せて実施し、県民会議会長賞を古家頌己さんと奥野久美子さんがそれぞれ受賞しました。



受賞校

グランプリ

- 田辺市立新庄中学校(和歌山県)

ぼうさい大賞

- 半田市立亀崎小学校(愛知県)
- 岩手県立宮古工業高等学校 機械科 津波模型班(岩手県)

優秀賞

- 高浜市立翼小学校(愛知県)
- 徳島市津田中学校 防災講座(徳島県)
- 高知県立須崎工業高等学校(高知県)
- 静岡大学教育学部 藤井基貫研究室(静岡県)

奨励賞

- 水の自遊人しんすいせんたいアカザ隊(山口県)
- 能登町立小木中学校(石川県)
- 秋田県立仁賀保高等学校 BV会 & Be助っ人(秋田県)
- 千葉県立東金特別支援学校(千葉県)
- 日本赤十字北海道看護大学 災害beatS研究会(北海道)

はばタン賞

- 萩市立育英小学校(山口県)
- 大船渡市立吉浜中学校 吉浜げんき隊(岩手県)
- 兵庫県立淡路高等学校 社会研究部(兵庫県)
- ACTION -students' project for 3.11-(宮城県)

だいじょうぶ賞

- 仙台市立桂小学校(宮城県)
- 関西大学 学生団体KUMC(大阪)

津波ぼうさい賞

- 奥尻町立青苗小学校(北海道)
- 高知市立南海中学校(高知県)
- 高知県立須崎高等学校(高知県)

教科アイデア賞

- 黒潮町立佐賀小学校(高知県)
- 大阪市立鶴見橋中学校(大阪府)

フロンティア賞

- 上富田ふれあいルーム(和歌山県)
- 西尾市立福地中学校(愛知県)
- 兵庫県立神戸聴覚特別支援学校(兵庫県)

継続こそ力賞

- アトリエ太陽の子(兵庫県)
- 印南町立印南中学校3年生 総合的な学習 津波研究班(和歌山県)

新人賞

- 愛知県立知立東高等学校(愛知県)

当機構は、以下の組織で構成しています。

●管理部

TEL 078-262-5580
FAX 078-262-5587

●研究調査本部

TEL 078-262-5570
FAX 078-262-5593

●人と防災未来センター

TEL 078-262-5050
FAX 078-262-5055

●学術交流センター

TEL 078-262-5713
FAX 078-262-5122

●こころのケアセンター

〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-3-2
TEL 078-200-3010
FAX 078-200-3017

ニュースレターに関するご意見・ご感想を機構までお寄せください



Hem21 NEWS
vol.50

平成27年3月発行

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2(人と防災未来センター)
<http://www.hemri21.jp/>